

カスミサンショウウオ サンショウウオ目サンショウウオ科  
*Hynobius nebulosus* (Temminck & Schlegel, 1838)

鳥取県：絶滅危惧II類 (VU)

環境省：-



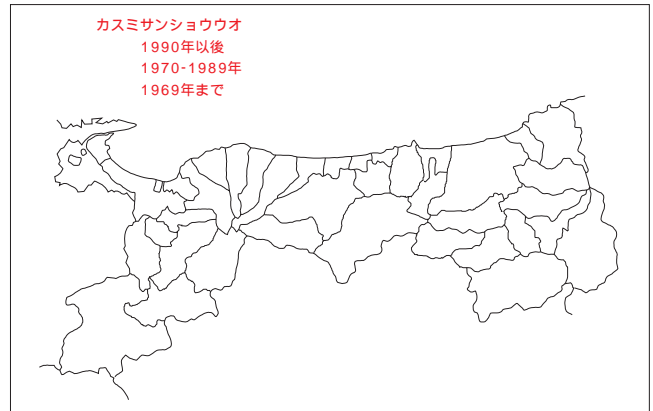
高地型の雄 大山川床 2000.4.22 / 撮影：岡田 純



低地型の雄 西伯町福成 2001.12.23 / 撮影：岡田 純

選定理由：県内の生息地が減少しており、個体数も少ない。とくに低地に生息する個体群は開発の影響で、いくつかの生息地ではほぼ絶滅状態にある。地方変異が顕著で、県下においても鳥取市周辺の個体群は大型、脊梁部には形態的に異なる高地型が分布しているなど学術的にも貴重。

形態と生態：全長9-12cm。背面は黄褐色で尾の上下に黄色条線がある。繁殖期は12-3月。脊梁部に生息する個体群は高地型と呼ばれ、近年になって存在が明らかになった。高地型はふつつ尾の黄色条線が不明瞭であること、体側や尾の白色小点が多く地衣状を呈すること、繁殖期の雄の尾はあまり側扁せず棒状、後肢の指は4本のことが多い(低地はふつつ5本)等で低地型と区別される。高地型の繁殖期は4-5月上旬。高地型はブチサンショウウオ、ヒダサ



ンショウウオと混生することがある。

分布(県内)：低地型は沿岸部を中心に低地(約20-400m)。高地型は日南町および大山の標高700-1000mの地点から確認済み(たぶん脊梁部に沿って分布)。

分布(県外)：愛知県以西の本州、四国、九州；高地型は中国山地脊梁部。日本固有種。

生息環境：低山から中国山地にかけての森林に生息し、湧水のある溝、湿地の泥中や落葉下、源流部の石の下面等に産卵する。

保護上の留意点：低地型の生息地は環境悪化で明らかに減少しており、早急な生息実態調査が必要。高地型の分布記録は少なく、両者の分布境界がどこか、など多くの課題が残されている。

特記事項：今回過去に記録のある15地点を再調査したが生息を確認できたのは7地点のみだった。考えられる減少の理由は、都市化による生息地の消失または悪化(溝口町金屋谷、会見町天万・朝金、中山町松河原木の根神社、淀江町福岡技術高校)；圃場整備による生息地の消失(岸本町上福万)；不明(三朝町東小鹿、東郷町羽衣石)である。

文献：  
 比婆科学教育振興会(編)(1996) 広島県の両生・爬虫類. 中国新聞社(広島), 168 pp.

野田吉夫(1993) カスミサンショウウオ. pp. 76-77. In: 鳥取県のすぐれた自然(動物).

執筆者：宇都宮妙子・岡田 純

ブチサンショウウオ サンショウウオ目サンショウウオ科  
*Hynobius naevius* (Temminck & Schlegel, 1838)

鳥取県：準絶滅危惧(NT)

環境省：-



日南町道後山 1999.4.20 / 撮影：岡田 純

選定理由：生息地が限定される。いずれの生息地も個体数が少なく、道路の敷設や皆伐等により生息環境が悪化している。

形態と生態：全長8-13cm。背面は茄子紺の地に銀灰色の地衣状斑紋がある。ふつう不明瞭な地衣状斑が腹面にある。幼生の指先に黒爪がない。産卵期は日南町で4月下旬～5月中旬。幼生は夏季に沢の淀みになどでみられ、多くは9月上旬までに変態する。道後山では越冬幼生が確認されている。本県には本種と生態的地位の重複するヒダサンショウウオが広く分布しており、本種が発見されにくい要因のひとつと考えられる。日南町土屋および道後山では高地型カスミサンショウウオと同所的にみられる。

分布(県内)：標高300m以上の山地森林。標本に基づく産地は日南町、鹿野町、用瀬町、および智頭町。過去に記録のある扇ノ山、氷ノ山、日野町板井原および大山町川床からは今回の調査でヒダサンショウウオやカスミサンショウウオ(高地型)が発見されたが本種は発見されなかった。分布記録のない地域を含め再調査が必要である。

分布(県外)：岐阜県以西の本州(京都府を除く)、四国、九



州(日本固有種)。

生息環境：山地森林。落葉広葉樹林の他、スギ植林地にも生息する。産卵場所は沢の湧水源に近い石の下や伏流水。

保護上の留意点：県内産の小型サンショウウオの中では産地、個体数が最も少なく生息地の保全が強く望まれる。山地森林に生息するため開発による影響は比較的少ないと思われるが、皆伐や生息地周辺での道路の敷設による生息環境の悪化が懸念される。

特記事項：環境庁(1978)は本県の小型サンショウウオの生息記録の総覧として引用されてきたが、当時は高地型カスミサンショウウオが認知されておらず、成体・幼生ともに本種やヒダサンショウウオと誤認されていたと思われる。混乱を避けるために本種およびヒダサンショウウオの標本のない過去の記録は採用しなかった。

文献：

環境庁(1978)第2回自然環境保全基礎調査,動物分布調査報告書(両生類・は虫類)鳥取県. 126 pp.

執筆者：宇都宮妙子・岡田 純

ヒダサンショウウオ サンショウウオ目サンショウウオ科  
*Hynobius kimurae* Dunn, 1923

鳥取県：準絶滅危惧(NT)

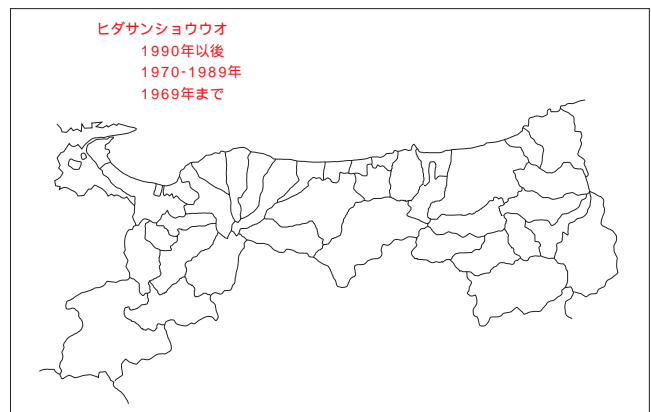
環境省：-



雌,若桜町氷ノ山 2001.10.11 / 撮影：岡田 純

選定理由：どの生息地も個体数が少なく、皆伐や生息地周辺での道路の敷設により生息環境が悪化している。

形態と生態：鳥取県を代表する山地流水性の小型サンショウウオ。全長8-16cm。背面に黄橙色の不規則な斑紋があるのが特徴。ふつう腹面に斑紋はない。斑紋に変異が



みられ、氷ノ山周辺の個体は黄橙色の斑紋が少なく黒っぽい個体が多い。産卵期は2-4月。幼生は指先に黒爪を有する。越冬幼生が比較的多くみられる。標高200mほどの低山地から1000mを超える中国山地脊梁部にかけて生息する。部分的にハコネサンショウウオ、ブチサンショウウ



オ, カスミサンショウウオと混生する。

分布(県内): 県内全域の山地。

分布(県外): 関東・北陸・中部・近畿の各地方, 山陰および中国山地脊梁部(日本固有種)

生息環境: 水源に近い山地森林。県内では常緑・落葉広葉樹林, 植林地。源流の石の下などに産卵する。

保護上の留意点: 本種は里山にも生息するので森林の伐採, 開発等には留意が必要。林道のコンクリート水路に幼生が流されていた例がある(河原町三滝溪)。

文献:

Matsui, M., Misawa, Y., Nishikawa, K., & Tanabe, S. (2000) Allozymic variation of *Hynobius kimurae* Dunn (Amphibia, Caudata). *Comp. Biochem., Physiol. Part B*, 125: 115-125.

岡田 純(1998) 中国山地東部の氷ノ山・後山・篠ヶ峰のサンショウウオ. *比婆科学*188: 3-6.

執筆: 宇都宮妙子・岡田 純

## ハコネサンショウウオ サンショウウオ目サンショウウオ科 *Onychodactylus japonicus* (Houttuyn, 1782)

鳥取県: 準絶滅危惧(NT)

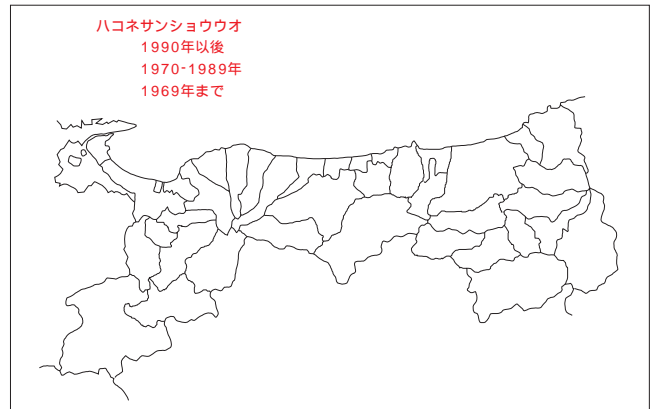
環境省: -



若桜町氷ノ山 2001.10.16 / 撮影: 岡田 純

選定理由: 県内の限られた山地森林に生息し, 個体数も少ない。皆伐や道路の敷設等により生息環境が悪化傾向にある。

形態と生態: 山地溪流に産卵する流水性の小型サンショウウオ。全長10-19cm。背面に朱色の縦縞または不規則な斑紋がある。幼生および繁殖期の成体に黒爪が発達し, 流水に適応している。5-6月ころ冷たい伏流水中で産卵する。幼生期間が3年あまりと長く, 溪流の石の下などでサイズの異なる幼生がみられる。変態後も肺が発達せず, 皮膚呼吸をおこなう。中国山地では, ふつうブナ帯の標高900m以上の山地に分布するが, 県内では県東部の山地を中心に生息高度が低下しており, 若美町長谷(標高約260m)でも発見されている。この生息高度の低下はヒダサンショウウオでもみられ, 中国地方の中では特異な生息域を形成している。



分布(県内): 標高約300mから1000mを超える山地森林まで。

分布(県外): 本州・四国の山地。西中国山地が西限。日本固有種。

生息環境: 水量の安定した山地森林に生息する。県内のほとんどの生息地でヒダサンショウウオと混生する。

保護上の留意点: 本種は幼生期間が長く水量豊富な溪流に幼生が多く生息している。皆伐による水量の減少, 生息地の乾燥化は幼生・成体ともに大きな影響を与える。林道が幼生の生息地を横切っている場所があり, 個体群が分断される可能性がある。

文献:

野田吉夫(1993) ハコネサンショウウオ. pp. 82-83. In: 鳥取県のすぐれた自然(動物)。

執筆: 宇都宮妙子・岡田 純

オオサンショウウオ サンショウウオ目オオサンショウウオ科  
*Andrias japonicus* (Temminck, 1836)

鳥取県：絶滅危惧 II 類(VU)

環境省：準絶滅危惧(NT)



選定理由：護岸工事や圃場整備等による生息環境の変化で個体数が減少している。

形態と生態：現存種では世界最大の両生類で、最大で150cmに達する。頭部は扁平で大きく、眼は小さい。四肢は短く前肢が4指、後肢が5趾。茶褐色の体に黒い斑紋が散在。斑紋は個体変異があり個体識別に使える。夜行性で、幼生は水生昆虫を、成長とともにサワガニ、魚、カエルなどを食う。繁殖期は8月下旬～9月で、河岸の水中の横穴や河床の巨石の下に複数個体が集まり産卵する。産卵数は400-500個程度。約50日でふ化した全長約3cmの幼生は、雄親に守られ1月頃まで産卵巣穴で過ごしたのち分散。外鰓は4-5年で退化縮小。小型サンショウウオ類と異なり、ほとんど一生水中で過ごす。飼育下では51年間の生存記録がある。県内での繁殖状況は不明。

分布(県内)：天神川水系、日野川水系の中・上流域。名和川など大山山麓の県中・西部の小河川にも生息する。千代川など県東部での記録は、人為的分布の可能性が高い。しかし、隣接の兵庫県の岸田川などは生息しており、今後、県東部の生息調査が待たれる。なお、ここに掲載の分布図(野村2001などに基づく)は主に県の文化課に集積されている保護記録によるもので、必ずしも実際の生息地を反映しているものではないことに注意。

分布(県外)：岐阜県以西の本州と四国、九州。中国山地

周辺が主要な生息地。日本固有種。

生息環境：河川の上流域。溪流だけではなく、中山間部の緩やかな流れにも多い。

保護上の留意点：護岸工事のみでなく、堰堤なども上流への移動を阻害する点で、繁殖への影響が懸念される。県内での繁殖は未確認で、もし繁殖による次世代の育成がなければ、現在の生息個体が数十年後に寿命に達した時には絶滅する可能性が高い。まずは繁殖状況の把握を主体にした生息実態調査が必要。生息環境、餌動物、上下流・支流との生態的連続性など総合的な保全対策を探ることが重要である。近年、天神川水系滝川や金谷川、日野川水系の印賀川などで本種の保全を目的とした河川改修工事が行われているが、その効果については今後追跡調査する必要がある。

特記事項：国の特別天然記念物(1952年指定)。国際希少野生動植物種(絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律 1993年公布)。県指定天然記念物「荒神原のオオサンショウウオ生息地」所在地：日野町上菅(1986年指定)。

文献：

野村幸弘(2001)鳥取県におけるオオサンショウウオの保護・確認情報とその考察。鳥取生物, 33/34: 15-18.

執筆者：中島 悟

イモリ サンショウウオ目イモリ科  
*Cynops pyrrhogaster* (Boie, 1826)

鳥取県：その他の重要種(OT)

環境省：-



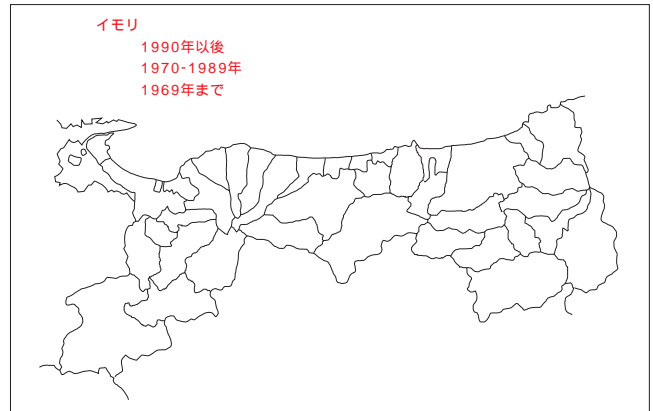
雌の広島型(西伯町福成, 左)と篠山型(関金町金谷川, 右)

選定理由：鳥取県内で本種の2つの地方型(篠山型と広島型)間の移行が起こる。都市化や圃場整備により個体数が減少している。

形態と生態：全長雄8-10cm, 雌10-13cm。背面は黒褐色で腹面に赤またはオレンジ色の不規則な黒斑がある。腹面の斑紋の違いによりいくつかの地方型が知られるが, そのうち県内には篠山型と広島型が分布し, 両者の中間的な個体もみられる。今回, 県内13市町村のいくつかの水田で生息調査を行なった。一つの水田または水路で100を超える個体数がみられたのは国府町の扇ノ山山麓と三朝町俵原, 若桜町氷ノ山山麓であった。他の地域は数個体から十数個体がほとんどである。また, 圃場整備された水田ではほとんど発見されず, 探すのが困難であった。

分布(県内)：県内全域。

分布(県外)：本州・四国・九州と周辺の離島(日本固有種)。



生息環境：池・水田・用水路等, 溪流の淀み。

保護上の留意点：本種は全国的にも著しく減少している。県下の比較できる過去のデータはないが, 都市化による生息地の消失, 圃場整備による乾燥化, 水路のコンクリート化等により確実に減少していると思われる。本県の産地は生物地理学的に貴重であり, 今後の調査と生息地の保全が強く望まれる。

文献：

Hayashi, T. & M. Matsui (1988) Biochemical differentiation in Japanese newts, genus *Cynops* (Salamandridae). Zool. Sci., 5: 1121-1136.

野田吉夫・鶴崎展巨(1993)イモリ. pp. 88-91. In: 鳥取県のすぐれた自然(動物).

執筆：宇都宮妙子・岡田 純

ニホンヒキガエル カエル目ヒキガエル科  
*Bufo japonicus* Temminck & Schlegel, 1838

鳥取県：情報不足(DD)

環境省：-



関金町金谷川 2001.7.19 / 撮影：岡田 純

選定理由：鳥取県は本種の2亜種ニホンヒキガエル(狭義)とアズマヒキガエルの移行地域とみられる。また, 平野部を中心に個体数が減少しているといわれるが, 比較できる過去のデータが集積されておらず実態が不明のため「情報不足」とした。

形態と生態：体長7-15cm内外。背面は茶褐色でイボ状の隆起がありざらざらしている。鼓膜のサイズなどで2亜種が区別される：西日本に分布するニホンヒキガエル(狭義) *B. j. japonicus* では鼓膜が小さくその長径はふつう眼と鼓膜

までの距離にほぼ等しい。一方, 東日本産のアズマヒキガエル *B. j. formosus* の鼓膜の長径は大きくふつう眼と鼓膜までの距離の2倍以上。両者は蛋白組成などでも分化していることがわかっている。鳥取県は両者の分布の移行域で, 鼓膜サイズが中間的で外部形態では同定困難な個体もみられる。しかしながら, 県内における両者の分布・生息状況は明らかになっていない。県内ではかつては民家の庭先にもよく現れたらしいが, 近年は溪畔や林道など山地での観察例が多い。春に長いひも状の卵を浅い水たまりなど止水に産卵する。

分布(県内)：県内各地。

分布(県外)：本州・四国・九州と周辺の離島(日本固有種)。2亜種の分布境界はほぼ出雲市付近から鈴鹿市付近を結ぶ線で, それより南にニホンが, 北にアズマが分布。

生息環境：低地から山地にかけての森林とその林縁部。

保護上の留意点：都市化による生息地の消失等により確実に減少していると思われる。両亜種の生息実態調査が急務である。

文献：

前田憲男・松井正文(1999)改訂版日本カエル図鑑. 文一総合出版. 223 pp.

執筆：宇都宮妙子・岡田 純



ナガレタゴガエル カエル目アカガエル科  
*Rana sakuraii* Matsui & Matsui, 1990

鳥取県：その他の重要種(OT)

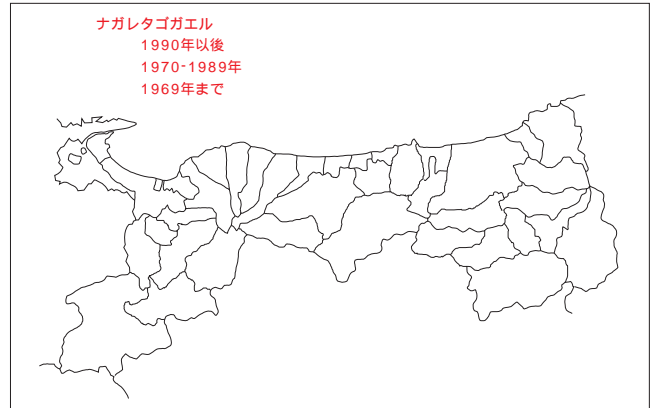
環境省：-



雄 若桜町来見野川 1999.4.12

選定理由：県東部の山地に分布が局限され、分布の西限に当たる。

形態と生態：山地森林に生息する溪流性のカエル。体長40-60mm。タゴガエルに似るが、本種は後肢の水かきが発達し趾端近くまでであるので区別できる。県内での詳しい生態は不明だが、11月下旬以降溪流に集まり越冬する。3月頃溪流で産卵すると思われる。繁殖期に雄の体側の皮膚が著しく伸長し弛む。県内では今のところ若桜町来見野川(標高約430-480m)が唯一の産地であるが、この付近には生息地がもう少し見つかるかと期待される。



分布(県内)：若桜町来見野川(標高約430-480m)。

分布(県外)：関東・北陸・中部・近畿の山地および鳥取県東部(日本固有種)。

生息環境：山間の溪流および森林。本県ではスギ植林地。

保護上の留意点：本県の詳しい分布状況は不明であり、生息実態調査が必要である。

文献：

岡田 純・亀山 剛・池田誠慈(2001)鳥取県で発見されたナガレタゴガエル。両生類誌, 6: 18-20.

執筆：岡田 純

ニホンアカガエル カエル目アカガエル科  
*Rana japonica* Gunther, 1858

鳥取県：準絶滅危惧(NT)

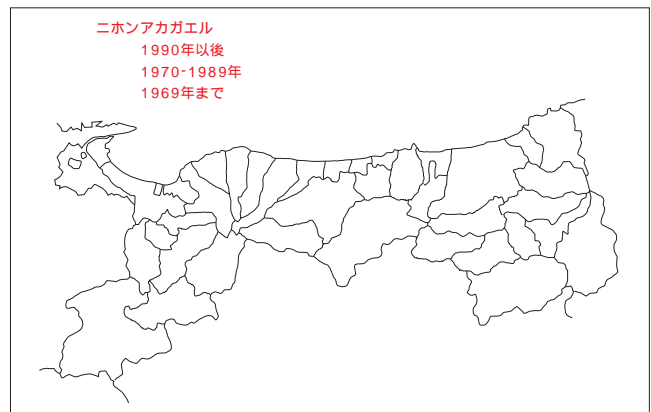
環境省：-



雌 西伯町福成 2001.12.23 / 撮影：岡田 純

選定理由：県内の確実な生息地が数カ所しかない。乾田化により全国的に減少している。

形態と生態：体長雄55mm、雌65mm内外。体は赤褐色だが、褐色が強い個体や、明るいオレンジ色の個体もみられる。眼の後方から後肢の付け根にかけてほぼ直線の隆条がある。繁殖期の雌の腹面は鮮やかなオレンジ色になる。1-3月、高地で5月にかけて日当たりのよい湿田や湿地、用水路にゼリー状の卵塊を産む。幼生(オタマジャクシ)は背面中央に一对の黒点があることが多い。県内で筆者等が確認しているのは西伯町福成と江府町俣野の2カ所のみ。他に、鳥取市、岩美町、米子市からそれぞれ1カ所、最近の記録がある。



分布(県内)：岩美町、鳥取市、米子市、西伯町、江府町。

分布(県外)：本州、四国、九州および周辺の島々(日本固有種)。

生息環境：水田周辺の草むらや湿地、林床など。

保護上の留意点：本種の減少の大きな原因は圃場整備による乾田化で産卵場所が失われていることである。本県における生息状況は不明であり、生息調査が必要である。

文献：

鶴崎展巨・岡田 純(2000)動物. pp. 59-92. In: 毛無山・宝仏山自然地域学術調査報告書。鳥取県。

執筆：宇都宮妙子・岡田 純

ツチガエル カエル目アカガエル科  
*Rana rugosa* Temminck & Schlegel, 1838

鳥取県：情報不足(DD)

環境省：-



河原町ライスセンター前 2001.10.3 / 撮影：岡田 純

選定理由：場所により個体数に減少傾向がみられるようであるが、比較できる過去の資料が乏しいため「情報不足」とした。

形態と生態：体長雄40mm、雌50mm内外。暗褐色でイボの多いカエル。ザラザラしてつかみやすいが手が臭くなる。5-9月に緩い流れの水草などに小卵塊を何回にも分けて産みつける。幼生（オタマジャクシ）で越冬する個体が見られる。県内全域に生息し、倉吉市および関金町の小鴨川流域の水田などでは現在でもかなりの数の鳴き声が聞か

れる。しかし、鳥取市などでは30年ほど前と比べると本種を見る機会が顕著に減少したと証言する人も複数いる。県外では、トノサマガエルなどとともに圃場整備の影響による個体数の減少が指摘されているところもあり、今後の動向に注意が必要。

分布(県内)：県内全域。

分布(県外)：本州、四国、九州、周辺の島々；朝鮮半島、中国東北部、沿海州南部。

生息環境：平地から低山地の水田、用水路、池、河原、溪流などの水辺。

保護上の留意点：近年、本種によく似たヌマガエル *Limnonectes limnocharis* Wiegmann, 1835が県内に侵入し分布を拡大しているので、同定には注意を要する。ヌマガエルは皮ふが滑らかでぬるぬるしていること、腹面が白い(ツチガエルではまだら模様)ことでツチガエルとは区別できる。ヌマガエルの多いところでは、ツチガエルやトノサマガエルが少ない傾向がみられるので、ヌマガエルの生息動向についても調査が望まれる。

文献：

倉本 満・岡田 純・鶴崎展巨(2002)山陰地方東部のヌマガエル. 爬虫両棲類学会報, 2002(1):10-13.

執筆：宇都宮妙子・岡田 純

カジカガエル カエル目アオガエル科  
*Buergeria buergeri* (Temminck & Schlegel, 1838)

鳥取県：その他の重要種(OT)

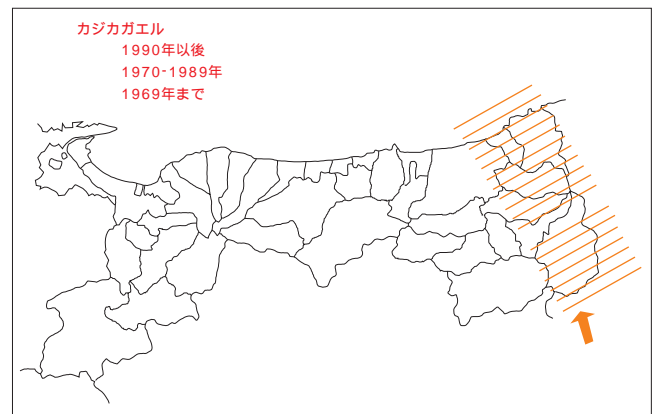
環境省：-



雄 関金町金谷川 2001.10.9 / 撮影：岡田 純

選定理由：カジカガエルは、その体型と幼生(オタマジャクシ)の歯列において、大きく日本を2分する東北型と西南型の2つの型に分かれるが、その日本海側の境界が県東部の蒲生川と千代川である。両河川ではその流域ごとにいる割合で2つの型が混棲しており、種分化を考える上で重要な流域であるが、近年の河川改修によりかなりの集団が失われている。

形態と生態：成体の体長4-6cm程度の中型の種であるが、形態よりも雄のなわばりによる鳴き声でよく知られ、種名も鳴き声からの河鹿に由来する。飼育が盛んに行われた時期があるようで、蛍籠と同様に「かじか籠」の存在が知られている。雄は河川の流水中に突出した岩上で5月中旬か



ら8月までの長期間なわばりを形成する。産卵は清流の石の下で行われ、幼生(オタマジャクシ)は流れのある場所で7-9月の長期にわたって観察できる。

分布(県内)：県内河川の中、上流域。

分布(県外)：本州、四国、九州(日本固有種)。

生息環境：比較的開けた河川の周辺山林など。

保護上の留意点：県内河川では下流域をのぞき特別の問題はないが、新たに生息地を復活しようとするような場合は、他の河川からの導入を避ける必要がある。2地理型の移行域(分布図の斜線部)の保全はとくに重要。

執筆：細井光輝